

コロナ禍で人とつながる

岐阜県立岐阜聾学校中学部 3年
藤川 心花（ふじかわ みはな）

声が聞こえない。口の形が読めない。話しかけられたのかさえわからない。」これは、あるアンケートに寄せられた言葉だ。

2020年、新型コロナウイルスの流行により、人々の生活が大きく変わった。私たち聴覚障害者の生活も不便なことがとても増えた。昨年夏休み、私は聴覚障害者がコロナ禍でどんなことに困り、どんな工夫をしているのかを調べた。アンケートには「マスクで口元が見えないので、コミュニケーションがとりづらくなった」という声が多く寄せられた。感染防止のためにマスクは必要なものだ。でも、声が聞こえにくく口の動きも読めないので、困っている人が大勢いた。また、何度も聞き返すことに申し訳なさを感じる人もいた。私自身、以前のようにコミュニケーションが取れず、強くストレスを感じるようになった。

聴覚に障害がある人は、音声だけでは相手が何と言っているかわかりにくい。そのため、様々な視覚情報を頼りにコミュニケーションを取っている。手話や文字、口の形や動き、表情、身ぶり手ぶりなどは、私たちにとって大事な情報源だ。特に、話す人の口の形の動きを読むことで情報を得ている人は多い。だから、大人も子どもも、コロナ禍の新しい生活様式の中でコミュニケーションに苦労しながら、それでも、なんとか工夫をして生活をしている。

アンケートには、口元が見える透明マスクの普及を願う声が多く寄せられた。私が通う聾学校の先生方は、透明マスクをして授業をしてくださるのでわかりやすい。でも、地域の学校に通う難聴の子どもたちは、先生の口も友達の口も見えず、困っている人が多い。また、聞こえる人であっても、マスクや仕切りで声が聞こえにくく、コミュニケーションが取りづらいと聞く。この問題を考えることは、聞こえにかかわらず、誰もがわかりやすい方法を生み出すことにつながるのではないかな。

コロナの流行をきっかけに、私は以前より聞こえのサポートをお願いする機会が多くなった。学校のオンライン授業や子ども司書のオンライン会議では、前もって音声認識アプリで字幕をつけてほしいとお願いをした。文字があることで話の内容がよくわかる。買い物や病院では、難聴であることやお願いしたいことを書いたメモを見せて伝えるようにしている。コロナの流行で不便なことは増えたが、自分から困っていることやどうしてほしいかを伝える機会が増えたのはよかったと思う。お願いしたとき、店員さんは笑顔で対応してくれた。筆談や身ぶり手ぶり、指さして教えてくれた。私たちが伝えることで、少しでも聴覚障害について知ってもらえる。知ってもらうことで、変わることがある。この1年、多くの聴覚障害者が声を上げたことによって、様々な企業が飛沫防止機能のついた透明マスクの開発に取り組むようになった。表情や口の形が見えることは、聞こえにかかわらず、誰にとってもわかりやすいことにつながるのではないかなと思う。伝えていくことが、世の中を変えていく。

コロナ禍で困っていることは、当事者だからこそ気づくことや、わかることがある。少しでも、世の中をよくしていきたいという一心で、私たち聴覚障害者のもつ視点を世の中に提供する。そうすることで、変わることがあると、私は信じている。

だから私は伝えていきたい。この気持ちは、私に障害があったからこそ得られたものだ。同じ障害をもつ人とも、違う障害をもつ人とも、病気の人とも、外国の人とも、いろんな人と出会い、関わっていきたい。障害に関係なく、人と人がつながる輪を私は広げていきたい。だから私は、「伝える」ことに挑戦する。誰かの心に残るように。関わることで知ってもらう。わかってもらう。

私は、自分の伝えたいという思いを大切に、これからも生きていきたい。